

此卷中不稱作者名字、徒錄年月所處緣起者、皆大伴宿禰家持裁作歌詞也、

〔空穂物語 菊の宴〕ふる雪をみてきこえ給へり

數ならぬ身は水のうへの雪なれや涙のうへにふれとかひなき御覽じこそおとらざらめと
きこえ給へり、あてみや、

水のうへに雪は山ともつもりなむうきてのみふる人のかいなさ、あなみぐるしやと、きこえ
給へり、

〔日本紀略^二朱卷〕天慶元年十二月六日己卯、雪降一許丈、〇一許丈、本朝世紀作一許尺、宜從、故老云、去寛平四年、京中雪
降三尺、其後未如此、

〔枕草子^八〕村上の御時、雪のいとたかう降たりけるを、やうきにもらせ給ひて、梅の花をさして月
いとあかきに、是に歌よめ、いかいふべきと、兵衛の藏人に給はせたりければ、雪月花の時とそ
うしたりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ、歌などよまんにはよのつね也、かうをりにあひ
たる事なん、いひがたきとこそおほせられけれ、

〔和漢朗詠集^下〕交友

琴詩酒友皆抛我、雪月花時獨憶君、白〇白居易

〔枕草子^五〕めでたきものひろき庭に雪のふりまきたる

〔枕草子^六〕あはれなる物 山里の雪

〔枕草子^八〕雪のいとたかくはあらで、うすらかにふりたるなどはいとこそをかしけれ、又雪のい

とたかく降つみたる夕ぐれより、はしちかうおなじ心なる人二三人ばかり、火をけなかにすゑ

て、物がたりなどするほどに、くらうなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと

まろ見えたるに、火ばししてはひなどかきすさびて、あはれなるもをかしまいひあはする